美術系大学の学生の予備校・画塾経験

――学生への質問紙調査をもとに――

比較教育社会学コース　　喜　始　照　宣

Art University Students and Their Yobiko Experiences: An Analysis of Art University Student Survey

Akinori KISHI

The aim of this paper is to examine what kind of students in art universities have experienced yobiko (prep schools) life and how they evaluate the experiences, using quantitative data obtained from students in four art universities in Japan. The main results are summarized as follows: (1) About 80% of the respondents have attended classes at yobiko before entering university; (2) experiencing yobiko life is influenced by factors such as social class, place of origin and type of high school; (3) most of the students who have regularly attended classes at yobiko think that they had positive experiences there.

目　　次

1　問題設定
2　先行研究の検討と分析課題の設定
　A　先行研究の検討
　B　分析課題の設定
3　調査データ・変数の概要
4　分析の結果
　A　美術系予備校・画塾経験者の割合，および通学開始時期
　B　美術系予備校・画塾経験者の社会的・文化的背景
　C　美術系予備校・画塾での経験に対する評価
5　まとめと考察

1　問題設定

本稿の目的は，大学入学以前における，美術系大学[1]の学生の美術系予備校・画塾[2]（以下，予備校・画塾とする）経験について，検討することである。具体的には，①どのくらいの学生がいつから予備校・画塾に通っているのか，また②予備校・画塾への参加度合いはどのような社会的・文化的背景要因と関連しているのか，そして③大学入学後の現在，そこでの経験をどのように評価しているのかについて，全国の美術系大学４校の学生を対象とした質問紙調査をもとに検証する。

現在，日本全国に，美術系大学受験の対策をおこなう予備校・画塾は，少なくとも100機関以上あり（表１），東京藝術大学，多摩美術大学，武蔵野美術大学など「高倍率の伝統校を目指すなら，美術系の予備校に通うことが必須となる。歴史のある美術系大学の合格者のほとんどは予備校経由であり，独学で合格している学生を見つけるほうが難しい」（学研教育出版編 2014，p.30）と言われるほど，予備校・画塾の存在感は大きい。特に「伝統校」を目指す受験生の多くは，入学試験の内容に対応した「受験絵画」の技術修得のため，首都圏にある大手・中堅予備校へと足を踏み入れ，そこでデッサンの技術という「美術の基礎」を学び，大学へと巣立っていく（荒木 2007）。そして，大学入学以降もそこで得た人間関係は継続すると言われるように，美術系予備校・画塾は，「受験時代を共に過ごした学生同士の（時には講師間の）社会的紐帯を育む場」（荒木 2007）として，単なる受験対策のための準備教育以上の機能も果たしている。

さらには，予備校教育が芸術家／アーティストの人材育成に資するという意見もある。例えば，著名な現代美術家である村上隆がその１人であり，「ここ30年以上，美大受験予備校の教育はアーティスト育成において『必要悪』だ，と業界内一般論として刷り込まれ続けて」きたが，「美大予備校的な詰め込み教育に関して再考，再評価するべきなのでは，と思っています」と述べている[3]。具体的には，氏は，予備校は「非常に短時間で，あるスキルを磨かせる技術にあふれています。しかも，デッサンと通常呼ばれているのとはま

た別に，最近の美術予備校，特に油絵科，先端技術などは意外とアイデンティティを発掘するような芸術家の根幹にあたるような作業まで短時間でトレーニングしているわけです」（村上 2010，p.216）とその教育方法を評価している。ただし，予備校・画塾の教育や受験教育に対しては賛否両論あり（荒木 2014），入試制度の問題と絡み，個々人の表現の可能性を減ずるものとして批判的に眼差されることも多い（例えば，杉田編 2010，p.40）。

このように，予備校・画塾は，日本における専門美術教育体制，広くは芸術分野での専門家育成過程を考える上で，良くも悪くも，無視できない学校外教育機関となっている。とはいえ，われわれが，美術系予備校･画塾について知っている部分はかなり小さい。「美術の社会制度史における存在意義も非常に大きい」(荒木 2007）と言われる一方，教育・社会学の分野だけでなく，美術史の分野においても，戦後の美術予備校･画塾に関する研究はほとんど蓄積されていない（荒木 2005)。ここに大きな学問上の間隙がある。そこで，本稿では，現在の美術系大学における学生の予備校・画塾経験について，量的データをもって検討し，美術の教育・社会学研究，美術史研究に１つの貢献をしたい。

本稿の構成は，以下の通りである。まず，第２章では，予備校・画塾に関する先行研究を検討し，分析課題を設定する。第３章では，調査データと分析に使用する変数の説明をする。そして，第４章では，学生の予備校･画塾経験に関する分析結果を提示する。最後に，第５章で，知見のまとめと考察をおこなう。

表１　美術系大学・学部，および美術系予備校・画塾の地域別分布[4)]

		地方別									都市－地方		
		北海道	東北	関東	北陸・甲信越	東海	近畿	中国	四国	九州・沖縄	都市部	地方部	合計
美術系大学・学部	実数	3	3	16	4	7	11	5	0	5	32	22	54
	%	*5.6*	*5.6*	*29.6*	*7.4*	*13.0*	*20.4*	*9.3*	*0.0*	*9.3*	*59.3*	*40.7*	*100.0*
美術系予備校・画塾	実数	2	3	50	4	10	29	7	2	9	83	33	116
	%	*1.7*	*2.6*	*43.1*	*3.4*	*8.6*	*25.0*	*6.0*	*1.7*	*7.8*	*71.6*	*28.4*	*100.0*

２　先行研究の検討と分析課題の設定

本章では，美術系予備校・画塾に関する先行研究の知見をまとめ，そこから見出される分析上の課題を提示する。

Ａ　先行研究の検討

美術系予備校・画塾を直接的な対象とした研究は数少ないが，ここではおもな研究として荒木（2005）と喜始（2013）を取り上げる。

まず，荒木(2005)では，東京藝術大学(＝東京芸大)の油画科を事例に，第２次世界大戦以前，およびそれ以降の芸大受験産業（「東京芸大受験に伴う産業」）の歴史がまとめられ，芸大受験産業や予備校教育に対する大学教員や学生の意識が聞き取り調査等から明らかにされている。そして，その結果，１)大学は予備校に模倣訓練としてのデッサン教育の期間を肩代わりさせることで，自らを「創造的な教育機関」として演出し，予備校と大学の実質的な「模倣訓練と創作活動の分業」体制を築いてきたこと，２)「かつては東京芸大が抱えていた「アカデミズム」と「ボヘミアニズム」の対立」を，現在では両教育機関で学ぶ学生各々が受け止めねばならない状況が生じていることを論じている（荒木 2005，p.69)。また，聞き取り調査から，大学教員や学生は，個性的な絵の描き方を教え込み，学生に絵画作品制作の規格化をもたらす予備校の教育に対し，批判的態度をとっていることが示されている。

つぎに，喜始（2013）では，おもに美術系学科（絵画，彫刻，工芸）の学生への聞き取り調査から，予備校の有用性と機能，現役と浪人での大学経験の差異が検討されている。そして，その結果，１)多くの学生は，予備校と大学を全く異なる場として意味づけているが，予備校で獲得した文化的資源（技術や考え方など）は大学入試突破のために必要なだけでなく，大学入学後の制作活動においても有用であると考えていること，２)予備校教育は，大学経験のための「文化的緩衝材」としての機能を有しており，美術制作者が共有する「共通言語」の提供もしていること，３)予備校での浪人生活を経ない現役入学者の中には，「現役コンプレックス」に悩む学生もいるが，彼らは

独自の表現行為の追求によりそれに対処していることが明らかにされている。また，荒木（2005）が見出した予備校教育に対する学生の批判的態度に対して，喜始（2013）は，学生は予備校経験が自らと決して切り離せないものであることを経験的に知っており，実質的に予備校で得た文化的資源を大学入学後の制作活動においても活用しているため，予備校教育にむしろ肯定的な場合が多いのではないかと推察している。なお，喜始（2013）の対象は，比較的入学難易度の高い美術系大学5校の学生であり，そのほとんどが予備校・画塾での経験を有していた。

そのほか，予備校・画塾を直接の対象としていないが，それに言及した研究に，生駒（2007；2010）もある。これらは美術系大学への進学者の進路選択過程を論じたものである。生駒（2007）では，京都造形芸術大学の学生を対象とした調査から，高校時代の「自分にとっての大きな出来事や体験」として，「画塾・美術系の予備校へ通う」を挙げる学生が最も多いことが指摘されている。また，つづく生駒（2010）では，同大学の学生への質問紙調査から，美術系進路について「高校には相談できる先生がいなかったので校外の画塾の先生などに相談した」学生が全体の約3割を占めることが示されている。これらの結果を見ると，美術系大学への進路選択の過程における予備校・画塾経験の重要性は看過できないと思われるが，そこではそれ以上の検討がなされていない。

このように，先行研究から様々な知見が提出されているが，以下の点に関する検討が不足していると考えられる。おもな課題点として3つを挙げる。

第1に，美術系大学の学生の予備校・画塾の経験状況やその時期などをまず量的に知る必要がある。先行研究では，予備校・画塾の質的な影響力は多角的に示されているが，その量的側面については経験データに基づく具体的な把握がなされていないからである。例えば，生駒（2010，p.111）は，自らのカウンセリングや聞き取り調査から，「約8割の学生が高校時代，画塾などで指導を受けていた」と推測するが，それだけではどういった層の学生がどの程度，いつから予備校・画塾を経験したのかわからない。さらに，近年では，AO入試や自己推薦入試の導入を背景に，必ずしもデッサンなど実技科目を選択せずとも入学できる学科が増えつつあり，「デッサンの共同体」としての美術系大学にはゆらぎが生じているとの指摘がある（加島　2010）。このように受験における実技（デッサン）の必要性が一部弱まっているとすれば，その修得のために予備校・画塾を経験しないまま美術系大学に進学する学生の増加も考えられるのである。

第2に，誰が，美術系大学受験のために，予備校・画塾を利用するか否か，あるいはできるか否かについても，明らかにされていない。予備校・画塾経験は，地域によって，出身家庭の経済・文化階層によって異なるのか。個々人の背景にある，いかなる社会的要因が予備校・画塾経験の差異をもたらすのか，その点について議論が進められる必要がある。

第3に，先行研究で議論が分かれている学生の予備校・画塾に対する態度・評価についても，経験的データをもとに再度検証する必要がある。また，先行研究では，油画科など美術系学科に対象が限定されていたため，さらに対象を広げ，デザイン系学科など，美術系大学における他学科も含めた上で比較検討されることが求められよう。

B　分析課題の設定

そこで，本稿では，美術系大学の学生を対象とし，かつ彼らの予備校・画塾の利用状況やそこでの経験に対する評価，彼らの出身背景に関する質問項目を有する質問紙調査データ（後述）をもとに，上記課題の乗り越えを試みる。このように美術系予備校・画塾経験を尋ねた学生データは稀であり，利用価値は高いと考えられる。具体的には以下の分析をおこなう。

第1に，美術系大学の学生のうち，どのくらいが，いつから予備校・画塾に通っているのか，その経験状況を把握する。その際，予備校・画塾経験に，通学か講習会のみかどうかの区分を設け，より詳細に見る。さらに，性別，大学・学科タイプや入学状況等による，その経験状況の違いも検討する。

第2に，予備校・画塾を経験するか否かの違いは，いかなる社会的背景要因によりもたらされるのかを見る。表1で見たように，予備校・画塾の多くは都市部に偏在している。さらにその授業料などは比較的高価である（喜始 2013）。そのため，美術系大学を志望したからといって，誰もが予備校・画塾に通える訳ではないと推測される。もちろん予備校・画塾経験の規定要因を探るには，進学を希望したが諦めた，美術系大学の潜在的進学者層も含めた上での分析が本来求められる。しかし，そうした分析が可能なデータの収集は，現実的に難しい。そのため，美術系大学進学者のみのデータではあるが，美術系大学進学に媒介する予備校・画塾の影響について，本稿でそのたたき台となる議論・仮説を提供し，今後の調査研究の発展に繋げ

たい。

第３に，予備校・画塾通学経験者に限定し，それらの学生が，そこでの経験を現在どのように評価しているのかを検証する。その際，先と同様，性別，大学・学科タイプや入学状況等による経験の捉え方の違いについても検討する。さらに最後は，予備校・画塾に対する肯定的評価の規定要因について，重回帰分析をもとに探索する。

3　調査データ・変数の概要

使用するデータは，筆者が実施した「美術系大学生の生活・意識・進路に関するアンケート調査」より得られたものである。調査は，2013年７月～11月にかけて，全国の美術系大学４校にて実施された。一部授業時間外の場合もあるが，基本的には１，２年生が多く受講する授業で質問紙を配布し，協力者である学生にはその場で回答をしていただいた（集団自記方法，有

表２　調査を実施した大学，および回答者の概要

		大学ランク	
		上位	中位
大学・所在地	地方部	【国公立・A大学】 学生数・規模：小規模 回答者数：88名(うち女性59名,1・2年生86名) 回答者の所属学科： 美術系59名，デザイン系18名 理論系8名，その他0名，無回答3名	【私立・B大学】 学生数・規模：中規模 回答者数：94名(うち女性70名,1・2年生81名) 回答者の所属学科： 美術系46名，デザイン系22名 理論系名15，その他11名
	都市部	【私立・C大学】 学生数・規模：大規模 回答者数：240名(うち女性206名,1・2年生240名) 回答者の所属学科： 美術系36名，デザイン系175名 理論系11名，その他18名	【私立・D大学】※中位・上 学生数・規模：中規模 回答者数：91名(うち女性64名,1・2年生70名) 回答者の所属学科： 美術系7名，デザイン系62名 理論系0名，その他22名

表３　分析に使用する変数の設定

	変数の設定
性別	女性と男性の2区分
出身地	出身地（地元だと思う都道府県）が，宮城，埼玉，千葉，東京，神奈川，愛知，大阪，兵庫，京都，福岡の場合を都市部，それ以外の場合を地方部とした．
父・学歴 母・学歴	卒業した学校が，大学，大学院の場合を「大学・大学院卒」，中学校，高校，専門学校・各種学校，短期大学・高等専門学校，その他，父親／母親はいない場合を「それ以外」とした．
父・職業	父親の職業が，専門・技術的な仕事，管理的な仕事の場合を「専門・技術／管理職」，事務の仕事，営業・販売の仕事，サービスの仕事，生産工程・建設の仕事，運輸・通信・保安の仕事，農業・林業・漁業の仕事，その他，父親はいない場合を「それ以外」とした．なお，定年退職の場合は，退職前の職業について．
芸術系学歴保持家族 芸術系職業従事家族	家族（両親・きょうだい）のうち，芸術に関係する学校に通っていた（通っている）者／仕事をしている（していた）者がいる場合を「いる」，いない場合を「いない」とした．ただし，回答者によって，家族には祖父，叔母なども含む．
世帯年収	両親の年収が，「600万円未満」，「600万円以上1000万円未満」，「1000万円以上」，「無回答」の4区分．
高校・学科	通っていた高校が，美術科（デザイン科，工芸科，普通科・美術コースを含む）である場合を「美術科」，普通科，商業科などの専門学科，総合学科，その他を「それ以外」とした．
高校・大学進学者割合	通っていた高校について，同級生のうち大学進学した人の割合から，「40％未満」，「40％以上60％未満」，「60％以上80％未満」，「80％以上95％未満」，「95％以上」の5区分（1～5）．
大学所在地	現在通っている大学の所在地を，地方部と都市部に2区分．A大学とB大学が前者，C大学とD大学が後者．
大学ランク	現在通っている大学のランクを，上位と中位に2区分．A大学とC大学が前者，B大学とD大学が後者．大学ランクは，美術系大学間でのそれであり，美術系大学関係者内での評価や入試倍率等をもとに筆者が設定．
大学・学科	現在所属している学科を，「美術系学科（絵画，彫刻，工芸など）」，「デザイン系学科（建築系含む）」，「理論系学科（芸術学など）」，「その他の学科（映像，メディアなど）」の4区分．
入学状況	入学状況を，「現役入学」と「それ以外」（1浪～4浪以上，社会人を経て入学，その他）に2区分．
入学形態	入試形態を，「一般入試」と「それ以外」（ＡＯ入試，一般推薦，指定校推薦，編入学入試，その他）に2区分．

効回答数526)。なお，以下では，入学までの経緯が異なる可能性を考慮し，留学生を除く513名のデータを分析する。調査実施大学，および回答者の概要は，表２に示した[5)]。

つぎに，本稿で使用する変数について説明する。被説明変数として用いるのは，予備校・画塾経験の有無，通学開始時期，予備校・画塾経験に対する評価（４項目）の３種類である。予備校・画塾経験の有無は，大学受験のために，美術系予備校・画塾の「学科・コース（基礎科・昼間部・夜間部）に通っていた」，「講習会（夏期講習・冬期講習・直前講習など）のみ参加した」，「まったく通っていない」の３分類である。これまで予備校・画塾経験が言及される場合，「通学」と「講習会のみ」の区別がなされないまま議論されてきたが，以下で見るように，両者間では学生の社会的背景に違いがある。通学開始時期は，学科・コース通学経験者に対象を限定し，「高校入学以前」，「高校１年生」，「高校２年生」，「高校３年生」，「高校卒業後」の５区分に設定した。予備校・画塾経験に対する評価も，同様に学科・コース通学者のみであり，「予備校・画塾での指導はきびしかった」，「予備校・画塾でやったことは大学入学以後も役に立っている」，「予備校・画塾で基本的な技術やものの見方が身につけられた」，「予備校・画塾に通ってよかった」の４項目（いずれも４点尺度）を設けた。それ以外の変数については，表３にその設定方法とともに掲示している。

４　分析の結果

Ａ　美術系予備校・画塾経験者の割合，および通学開始時期

まず，学生のうち，どのくらいが，受験対策として，美術系予備校・画塾に通っていたのか。また，通学していた場合，それはいつからか。それらについて検討する。

表４より，回答者に占める予備校・画塾経験者の割合を見てみると，全体のうち，６割以上の学生が学科・コースに通っていたことがわかる。講習会のみに参加した者（15.5%）も含めると，何らかのかたちで予備校・画塾を経験した学生は全体の約８割に及んでいる。

また，その参加の度合いには，性別，現在通う大学の所在地・ランク・学科，入学状況，入学形態による統計的に有意な差が確認される（表４）。すなわち，

表４　美術系予備校・画塾経験者の割合

		美術系予備校・画塾経験の有無			合計（N）
		学科・コースに通っていた	講習会のみ参加した	まったく通っていない	
性別 *	男性	57.3	11.8	30.9	110
	女性	64.7	16.5	18.8	394
大学所在地 ***	都市部	73.0	15.5	11.5	330
	地方部	44.3	15.5	40.2	174
大学ランク***	上位	77.0	13.7	9.3	322
	中位	38.5	18.7	42.9	182
学科 ***	美術系	63.0	19.2	17.8	146
	デザイン系	71.7	14.3	14.0	272
	理論系	25.0	9.4	65.6	32
	その他	41.2	15.7	43.1	51
入学状況 ***	現役入学	52.8	21.0	26.2	362
	それ以外	90.1	1.4	8.5	141
入学形態 ***	一般入試	74.5	13.7	11.9	388
	それ以外	25.0	21.6	53.4	116
全体		63.1	15.5	21.4	504
（大学別 ***）	A大学	73.2	17.1	9.8	82
	B大学	18.5	14.1	67.4	92
	C大学	78.3	12.5	9.2	240
	D大学	58.9	23.3	17.8	90

注：　*: $p<0.05$,　***: $p<0.001$.　χ^2検定による.

1）男性よりも女性のほうが，学科・コースや講習会に参加した者の割合が高いこと，2）都市部の大学に通っているか，あるいは大学ランクが上位の学生で，学科・コース通学者の割合が高いこと，3）大学・学科別には，美術・デザイン系の学生では，学科・コース通学者の割合が高いが，理論系，その他の学科の学生では，まったく通っていなかった学生の割合が最も高いこと，そして4）現役入学者では5割程度なのに対して，それ以外の浪人後入学者等では9割以上が学科・コースに通学していたことが読み取れる。

ここで，特に注目されるのが，大学ランク間での差であり，上位校では，8割弱の学生が予備校・画塾の学科・コースに通っているのに対して，中位校では，6割以上の学生がそうした経験をしないまま，大学へと進学している。現在，美術系大学全体における，「デッサンの共同体」（加島 2010）としての圏域は，入試形態の多様化により，かなり狭まってきているのかもしれない。ただし，大学間でその差は大きく，大学ランク・中位校でも，B大学（地方部）ではまったく通ったことがない学生の割合が67.4%にも達するのに対して，D大学（都市部）では17.8%とそれほど高くない。

つづいて，学科･コース通学者に限定して，その通学開始時期を見る（表5）。全体のうち，40.3%の学生が高校2年生から，30.6%の学生が高校3年生から，予備校・画塾に通っている。高卒後から通い始める者も1割程度おり，浪人後入学者等の「それ以外」に限定して見た場合，その割合は2割程度になる。他方，高校入学以前の早期から通っている者は，5%程度とほとんどいない。そのため，多くの学生にとって，高校2，3年時に美術系大学への進学希望がある程度明確になった際に，受験対策のための予備校・画塾を探し通い始めるのが，一般的なのだろうと推測される[6)]。

表5　美術系予備校・画塾への通学開始時期（学科・コース通学者のみ）

		美術系予備校・画塾への通学開始時期					合計（N）
		高校入学以前	高校1年生	高校2年生	高校3年生	高校卒業後	
性別 n.s.	男性	6.3	12.7	33.3	30.2	17.5	63
	女性	4.5	15.4	42.1	30.8	7.3	247
大学所在地 †	都市部	4.3	15.7	43.8	28.1	8.1	235
	地方部	6.7	12.0	29.3	38.7	13.3	75
大学ランク n.s.	上位	5.3	15.6	39.3	30.7	9.0	244
	中位	3.0	12.1	43.9	30.3	10.6	66
学科 n.s.	美術系	5.6	15.6	32.2	35.6	11.1	90
	デザイン系	4.8	16.4	43.9	26.5	8.5	189
	理論系	0.0	0.0	50.0	25.0	25.0	8
	その他	4.8	4.8	38.1	47.6	4.8	21
入学状況 ***	現役入学	4.9	14.8	44.8	35.5	0.0	183
	それ以外	4.7	15.0	33.9	23.6	22.8	127
入学形態 n.s.	一般入試	5.0	14.9	40.1	30.9	9.2	282
	それ以外	3.6	14.3	42.9	28.6	10.7	28
全体		4.8	14.8	40.3	30.6	9.4	310
（大学別 n.s.）	A大学	6.7	13.3	28.3	41.7	10.0	60
	B大学	6.7	6.7	33.3	26.7	26.7	15
	C大学	4.9	16.3	42.9	27.2	8.7	184
	D大学	2.0	13.7	47.1	31.4	5.9	51

注：†: $p<0.10$，***: $p<0.001$．χ^2検定による．

B　美術系予備校・画塾経験者の社会的・文化的背景

このように多くの学生が大学入学以前に美術系予備校・画塾を経験しているが，予備校・画塾への参加度合いは，かれらの社会的・文化的背景によって異なるのか。本節ではその点を確認することで，予備校・画塾経験の地域・階層間格差の可能性を探る。クロス集計をもとにした結果が表６である。なお，父・職業，世帯年収，および芸術系家族の有無は，調査時点でのものだが，対象者の多くが１，２年生であり，当時の状況とそれほど大きな変化はないと想定し，以下用いている。

表６の結果を見ると，出身地，父・学歴，母・学歴，父・職業，世帯年収，高校・学科，高校・大学進学者割合によって，予備校・画塾経験には統計的に有意な差が確認される。特に，学生が都市部出身である場合，高学歴（大学・大学院卒）の母をもつ場合，あるいは経済高階層（世帯年収1000万円以上）出身の場合に，予備校・画塾の学科・コース通学者の割合が７割以上と高くなっている。他方，講習会のみの受講である者の割合は，高校･学科が美術科である学生で３割以上と高く，まったく通ったことがない者の割合は，非「進学校」（大学進学者割合が６割未満の高校）出身者で３割以上と高くなっている。

今回のデータは，美術系大学に進学できた層のみを対象としたものではあるが，それでも学生の社会背景的要因，すなわち出身地域，出身家庭の文化・経済資本の多寡，そして出身高校の学科・ランクによって，予備校・画塾へ通学するか／できるか否かは影響を受けること，それが比較的明瞭に見出される結果となっている。ただし，家庭の出身階層の影響については解釈に留意が必要である。というのも，例えば，大学ランクが高い大学ほど，父親が専門・技術／管理職である学生の割合が高い傾向が見られたため[7]，それは志望する大学ランクの効果を少なからず含む可能性が高いからである。今回のデータでは十分に検証できないが，高社会階層の学生ほど，より上位の大学を目指す

表６　美術系予備校・画塾経験の有無（学生の社会的・文化的背景別）

		美術系予備校・画塾経験			合計（N）
		学科コースに通っていた	講習会のみ通っていた	まったく通っていない	
出身地 ***	都市部	70.5	12.7	16.8	292
	地方部	52.8	19.3	27.8	212
父・学歴 **	大学・大学院卒	69.2	14.4	16.4	299
	それ以外	54.5	17.1	28.3	187
母・学歴 ***	大学・大学院卒	75.7	11.6	12.7	173
	それ以外	56.8	17.7	25.6	317
父・職業 **	専門・技術職／管理職	69.1	13.5	17.4	311
	それ以外	53.7	18.3	28.0	175
芸術系学歴保持家族 n.s.	いる	65.8	19.7	14.5	76
	いない	62.2	15.0	22.8	421
芸術系職業従事家族 n.s.	いる	63.9	20.5	15.7	83
	いない	62.4	14.6	22.9	410
世帯年収 *	600万円未満	53.8	19.3	26.9	145
	600万円以上1000万円未満	65.2	17.1	17.7	164
	1000万円以上	72.9	5.7	21.4	70
	（無回答）	65.6	14.4	20.0	125
高校･学科 ***	美術科	46.9	31.3	21.9	128
	それ以外	68.8	10.1	21.1	375
高校・大学進学者割合 *	40％未満	53.6	14.3	32.1	28
	40％以上60％未満	39.5	27.9	32.6	43
	60％以上80％未満	58.9	16.8	24.2	95
	80％以上95％未満	63.8	16.2	20.0	130
	95％以上	69.4	13.0	17.6	193
全体		63.1	15.5	21.4	504

注：*: p<0.05,　**: p<0.01,　***: p<0.001.　χ^2検定による.

よう促されており，それゆえに，その合格確率を高めるために予備校・画塾の学科・コースを選択する傾向があると考えることが妥当だと考えられる。予備校・画塾経験の地域・階層間格差のさらなる検証は今後の課題としたい。

C　美術系予備校・画塾での経験に対する評価

最後に，美術系予備校・画塾を経験した学生たちは，そこでの経験をどのように評価しているのか。本節では，先と同様，学科・コース通学者に対象を限定し，それを検討する。基礎的な結果は表 7 に示した通りである。

まず，「予備校・画塾での指導はきびしかった」を見ると，「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の計。以下，同様）と回答した者は，44.9％と半数を下回っている。もちろん予備校・画塾によっ

表 7　美術系予備校・画塾での経験に対する評価（度数分布，学科・コース通学者のみ）

	とても そう思う	まあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない	合計（N）
予備校・画塾での指導はきびしかった	14.2	30.7	46.2	8.9	316
予備校・画塾でやったことは 大学入学後も役に立っている	54.1	35.8	9.2	0.9	316
予備校・画塾で基本的な技術や ものの見方が身につけられた	60.1	33.5	6.0	0.3	316
予備校・画塾に通ってよかった	71.5	26.3	2.2	0.0	316

表 8　美術系予備校・画塾での経験に対する肯定的評価の規定要因（重回帰分析，学科・コース通学者のみ）

被説明変数：予備校・画塾への肯定的評価（5～12点）	モデルⅠ			モデルⅡ			モデルⅢ		
	b	S.E.	β	b	S.E.	β	b	S.E.	β
（定数）	9.769 ***	0.378		9.974 ***	0.499		9.948 ***	0.552	
性別：女性（基準：男性）	0.664 **	0.219	0.172	0.596 **	0.221	0.157	0.618 **	0.227	0.168
大学所在地（都市部＝1，地方部＝0）	-0.579 *	0.276	-0.159	-0.562 *	0.280	-0.158	-0.401	0.289	-0.116
大学ランク（上位＝1，中位＝0）	0.313	0.217	0.084	0.201	0.216	0.055	0.239	0.225	0.067
学科（基準：美術系学科）									
デザイン系学科	0.361	0.254	0.114	0.272	0.257	0.087	0.270	0.263	0.089
理論系学科	0.297	0.568	0.030	0.218	0.559	0.023	0.674	0.587	0.072
その他の学科	0.199	0.417	0.032	0.072	0.414	0.012	0.055	0.418	0.010
入学状況（現役入学＝1，それ以外＝0）	-0.238	0.180	-0.075	-0.356 †	0.180	-0.115	-0.314 †	0.185	-0.104
入試形態（一般入試＝1，それ以外＝0）	0.250	0.318	0.046	0.189	0.317	0.036	0.322	0.330	0.062
予備校・画塾の指導（厳しかった=1，厳しくなかった=0）	0.490 **	0.177	0.158	0.561 **	0.177	0.185	0.587 **	0.183	0.199
高校・学科（美術科＝1，それ以外＝0）				-0.309	0.239	-0.080	-0.245	0.254	-0.063
高校・大学進学者割合（5段階）				0.041	0.078	0.031	-0.034	0.084	-0.025
出身地（都市部＝1，地方部＝0）							-0.237	0.195	-0.076
父・学歴（大学・大学院卒＝1，それ以外＝0）							0.171	0.220	0.054
母・学歴（大学・大学院卒＝1，それ以外＝0）							0.000	0.196	0.000
父・職業（専門・技術職／管理職＝1，それ以外＝0）							0.126	0.207	0.039
芸術系学歴保持家族（いる＝1，いない＝0）							-0.278	0.272	-0.068
芸術系職業従事家族（いる＝1，いない＝0）							0.203	0.272	0.051
家族・世帯年収（基準：600万円未満）									
600万円以上1000万円未満							-0.002	0.239	-0.001
1000万円以上							-0.411	0.293	-0.104
無回答							-0.013	0.263	-0.004
R^2	0.080			0.090			0.118		
Adjusted R^2	0.053			0.056			0.050		
N	314			302			279		

注：†: p<0.10，*: p<0.05，**: p<0.01，***: p<0.001.

ては厳しい鍛錬を課す所もあるだろうが，全体的に見て，予備校・画塾で厳しい指導を経験したと感じている学生はそれほど多くないようである。

他方，「予備校・画塾でやったことは大学入学後も役に立っている」，「予備校・画塾で基本的な技術やものの見方が身につけられた」に，「そう思う」と回答した者は，それぞれ89.9%，93.7%と，ほとんどの学生が予備校・画塾での経験を有用であったと，肯定的に捉えている。さらに，「予備校・画塾に通ってよかった」に対しては，97.8%が「そう思う」と回答しており，予備校・画塾経験を批判的に捉えている学生はかなり少数派に位置すると考えられる。学生の予備校・画塾経験に対する評価は概して高いと言って良いだろう。

では，予備校・画塾の学科・コース通学者の中でも，特にどういった層の学生が，そこでの経験に対して肯定的な評価をしているのか。本節最後に，重回帰分析をもとに，予備校・画塾経験に対する肯定的評価の規定要因を見ていきたい。なお，ここで被説明変数とするのは，「予備校・画塾でやったことは大学入学後も役に立っている」，「予備校・画塾で基本的な技術やものの見方が身につけられた」，「予備校・画塾に通ってよかった」への回答（それぞれ１～４点）を合算したものである（$\alpha=0.788$）。これを以下では「予備校・画塾への肯定的評価」変数とし，使用する。また，予備校・画塾の指導の在り方が上記の肯定的評価に与える影響を検証するため，「予備校・画塾での指導は厳しかった」への回答を２区分としたダミー変数も説明変数に投入した。重回帰分析の結果は表８に掲示している。

性別，大学・学科タイプ，入学状況，入学形態，予備校・画塾の指導（厳しさ）を説明変数として投入したモデルⅠからまず読む。これを見ると，性別，大学所在地，予備校・画塾の指導が５%水準以下で有意である。つまり，男性よりも女性のほうが，都市部の大学よりも地方部の大学に通っているほうが，そして予備校・画塾での指導が厳しかったほうが，予備校・画塾での経験を肯定的に評価している。これらの解釈は難しいが，女性や地方部の大学の学生では，他と比べて，予備校・画塾で得た基礎的知識・技術を活かし，それらをベースに，大学での制作・表現活動に取り組む場合が多いのかもしれない。他方，予備校・画塾の指導の厳しさに関しては，それが大手と中・小予備校・画塾との指導体制の違いを反映したものである可能性を無視できないが，予備校・画塾でどういった指導を受けたのかが，受験だけでなく，その後の大学生活にも影響を及ぼしている可能性が見受けられ，美術系大学と予備校の関係性を考える上で興味深い結果と言える。

つづいてモデルⅠに高校の学科・タイプを追加したモデルⅡでは，それらの変数の有意な効果は残り，加えて入学状況の効果も10%水準ではあるが現れている。高校と並行しながら予備校・画塾に通った現役入学生よりも浪人後入学生等のほうが，予備校・画塾で密度の高い教育・指導を受けることができ，またそれが大学生活を営む上で有益な資源を提供するものであるがゆえに，予備校・画塾を肯定的に評価しているのではないかと推測される。最後に，出身地や家庭の文化・経済的背景を追加したものがモデルⅢであるが，これを見ると，新たに投入した変数の有意な効果は見られず，性別と予備校・画塾の指導のみが５%水準以下で有意となっている。前節では予備校・画塾への通学機会に地域・階層間格差がある可能性を見出したが，予備校・画塾への肯定的評価，つまりその教育効果に関しては，学生の出身背景による差異はそれほど大きくないと推察される。

5　まとめと考察

本章では，分析より得られた知見をまとめ，それらの知見について考察し，本研究から示唆される点について論じる。まず，分析から得られたおもな知見は以下の通りである。

① 回答者の学生の８割弱が，大学入学以前に予備校・画塾の学科・コースの通学（63.1%），あるいは講習会の受講のみ（15.5%）を経験している。ただし，性別，所属する大学・学科のタイプ，入学状況や入学形態によって，予備校・画塾への参加度合いは異なる。通学者の通学開始時期は，希望進路が決まる高校２，３年生時（71.0%）に多い。

② 予備校・画塾への参加度合いには，出身地が都市部か否か，出身家庭の文化・経済的背景，そして出身高校の学科・タイプによって，統計的に有意な差が見られる。特に，都市部出身あるいは親の学歴が高い場合に，学科・コースへの通学割合が高まり，高校で美術系の学科だった場合に，講習会のみ受講の割合が高くなる傾向がある。

③ 予備校・画塾経験に対する評価を見ると，そこでの指導を厳しかったと回答した者は半数以下

（44.9％）である。他方，大多数の学生は，予備校・画塾でやったことは大学入学後も役に立っている（89.9％），基本的な技術やものの見方が身につけられた（93.7％），予備校・画塾に通ってよかった（97.8％）と考えている。重回帰分析の結果によると，予備校・画塾への肯定的評価には，特に性別，大学所在地，入学状況や予備校・画塾の指導の厳しさが統計的に有意な効果を示す。

つづいて，これらの知見について考察し，そこから示唆されることについて3点述べる。

第1に，予備校･画塾を経験し美術系大学へと進学した学生は全体の8割近くいるが，その中には講習会のみ参加の者も少なくない割合でおり，それは高校・美術科出身の学生に多いパターンであること，そして通学経験者の割合は現在所属する大学・学科のタイプによって大きく異なることは重要な知見である。特に，大学ランクによる，正確には大学間での予備校・画塾経験の差異の大きさは注目される。なぜなら，この結果は，美術系大学の「デッサンの共同体」としての揺らぎだけでなく，予備校・画塾と大学による「模倣訓練と創造活動の分業」体制（荒木 2005）の縮小，およびそれに伴う大学の教育責任／負担の増加をも示唆するからである。受験者が減少し，入試形態の多様化が進む，多くの美術系大学において，これまで予備校・画塾が担ってきた基礎教育はいかに引き受けられているのか[8)]。本研究からさらに対象を拡張し，特にどういった大学・分野で，いかなる教育の変質・課題が生じているのか，その問題構造の解明が今後の研究課題となるだろう。

第2に，学生の背景要因，特に出身地や出身階層と予備校･画塾の通学経験との間に少なからぬ関連性があるという知見は，予備校･画塾への通学有無を介して，美術系大学への進学機会の地域・階層間格差が生じている可能性を示唆している。受験情報の多寡や体系的な指導ノウハウの有無によって「大手と中小予備校との間では指導能力に大きな差が生じ，有名大学の合格者を大手が独占し必然的に翌年の受験生が大手に集中するという，社会構造の再生産が成立している」（荒木 2007）と言われてきたが，それに加えて，それ以前の段階での，予備校の都市部偏在や授業料の高さなどに起因する，その通学機会の不平等問題ついても，今後さらなるデータの積み重ねのもと議論される必要がある。

そして，第3に，学生の予備校･画塾に対する態度・評価については，先行研究で意見が分かれていたが，今回の分析では喜始（2013）の知見を支持する結果が見られた。すなわち，予備校・画塾での経験の有用性を認め，それに肯定的である学生が圧倒的に多く，批判的態度をとる学生は少数派であった。しかし他方で，学生の属性や大学のタイプ，予備校・画塾での指導の厳しさによって，予備校・画塾に対する評価の高低に違いがあることも，先行研究から進んで新たに明らかとなった。この知見は，学生のタイプや状況によって，予備校･画塾で獲得した知識，技術，ものの見方などの文化的資源の活用の仕方にはヴァリエーションがあることを示唆しており，興味深い。大学生活の諸局面，特に制作活動面で，どういったタイプの学生が，予備校･画塾で獲得した資源を活用しているのか否か。また，どのようにか。予備校･画塾経験が学生の大学生活での適応や取り組みに与える影響については，質的，量的データそれぞれを活用し，より微細に検討することが不可欠だろう。この課題については，別稿にて検討を進める。

最後に，本稿の限界と今後の課題を述べる。まず，本稿では，大学ランクの上･中位校を対象としたため，下位校の学生の予備校･画塾経験については検討できなかった。本調査結果から推測すると，下位校では予備校･画塾経験者は少数派だと思われるが，そうした「模倣訓練と創造活動の分業」体制が成立しにくい領域に対しても今後アプローチが必要である。さらに，前述の論点である，予備校・画塾利用の地域・階層間格差について議論を深めるには，潜在的進学者層も含めた上での検討が不可欠である。今後もさらに調査研究を進め，多角度から美術系大学と予備校･画塾の関係性に切り込んでいきたい。

注

1）本稿では，美術系大学を，美術系大学・学部と同義とし，教員養成課程の美術専攻は含めていない。具体的な大学・学部に関しては，学研教育出版編（2014）等を参照。

2）ここには，美術系大学受験のための，おもにデッサンなどの実技対策をおこなう，美術予備校，画塾，美術研究所などの学校外教育機関すべてを含むものとする。

3）「日本の美術教育，徹底討論」『美術手帖』美術出版社，2009年10月号（第61巻通巻928号），p.68

4）大学･学部数は，学研教育出版編（2014）をもとにした。宝塚大学は，兵庫と東京のキャンパスそれぞれに芸術系学部をもつため，ダブルカウントした。予備校数は，学研教育出版編（2014），および美術手帖編集部（2014）の掲載校を合算し，そこから重複する学校数を除いた値。なお，前書では，美術系予備校・画塾は，

「受験予備校・美術研究所」と表記されている。また，都市部－地方部の区分は，表３の変数作成と同じ。

５）表中の回答者数は，留学生を除いた数。また，都市部－地方部，大学ランク，学科の分類は，表３の変数の作成と同じ。

６）学科・コース通学者に限定し，美術系大学・学部への進路決定時期と予備校・画塾の通学開始時期のクロス集計を見ても，後者の時期が前者よりも先行する者は，310名中12名（3.9％）のみであった。なお，両者が同時期である者は189名（61.0％），後者の時期が前者よりも遅い者は109名（35.2％）であった。

７）大学ランクと父・職業をクロス集計した結果，大学ランク・上位の大学の学生（N＝312）のうち，67.9％が専門･技術／管理職，32.1％がそれ以外の職の父親を持っているのに対して，中位校の学生（N＝176）では，56.3％が専門･技術／管理職，43.8％がそれ以外の職の父親を持っていることが示された（N＝488，χ^2値＝6.662，$p<0.010$）。ただし，大学別に見ると，中位校でも，地方部のＢ大学では専門･技術／管理職の父がいる学生は48.4％と他と比べ低いが，都市部のＤ大学では64.7％とそれほどでもない。

８）例えば，こうした問題を背景とした教育実践の試みとして志茂（2012）などがある。

引用文献

荒木慎也 2005「つくられる個性－東京芸術大学と受験産業の美術教育」東京大学大学院総合文化研究科修士学位論文

――― 2007「美術学校・大学の予備校」多木浩二・藤枝晃雄監修『日本近現代美術史事典』東京書籍，p.400

――― 2014「美術予備校に見るアートの独自性」フィルムアート社編集部編『現代アートの本当の学び方』フィルムアート社，pp. 72-77

美術手帖編集部 2014『アートスクールガイド2014　全国美術系高校・大学・専門学校進学案内』美術出版社

学研教育出版編 2014『2015年度用　芸大・美大受験案内』学研教育出版

生駒俊樹 2007「大学生のキャリアデザインの形成過程の研究－芸術系大学学生の大学受験までのライフヒストリー」『京都造形芸術大学紀要』第12号，pp. 191-205

――― 2010「キャリアデザイン形成過程の研究－芸術系大学生の進路選択」『キャリアデザイン研究』第６号，pp. 103-112

加島卓 2010「美大論－専門教育の境界の融解」遠藤知巳編『フラット・カルチャー－現代日本の社会学』せりか書房，pp. 126-133

喜始照宣 2013「美術系大学生と予備校－大学生活における現役／浪人の差異に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻，pp. 137-146

村上隆 2010『芸術闘争論』幻冬舎

志茂浩和 2012「「無知の知」からはじめる形態認識－ブログサービスを活用したデッサン教育の試み」『芸術工学2012』神戸芸術工科大学

杉田敦編 2010『アートで生きる』美術出版社

（指導教員　本田由紀教授）